

PROFILE

藤 井 聡

山形大学医学部生理学教室



平成 20 年 (2008 年) 3 月 1 日に准教授より昇任いたしました。当教室では学部教育として生理学を中心に人体機能学を担当しています。研究は神経生理学を中心に生理学全般を範囲としています。

当教室は昭和 49 年 (1974 年) 4 月 1 日に、東北大学医学部応用生理学教室から西山明德先生を初代教授として迎え医学部生理学第 2 講座として開設されました。昭和 56 年 (1981 年) 8 月に西山明德教授が東北大学生理学第 1 講座へ転出されました。昭和 57 年 (1982 年) 7 月に加藤宏司先生が秋田大学生理学第 1 講座より赴任され、第 2 代教授として平成 19 年 3 月まで当教室を主宰されました。私は平成 6 年 (1994 年) 8 月に当教室に助手として採用され、加藤先生のもとで研究・教育に従事するようになりました。

私は学生時代に生理学が全くわかりませんでした。もちろん、何の理由もなくわからなかった訳ではありません。医学部専門課程に進んだ時は本当にうれしかった。先輩達が何気なく白衣のポケットに聴診器を入れて、楽しそうに専門用語を交えて会話しているのをみると胸が高鳴ったのを覚えています。そうして生理学の講義が始まりました。最初のうちは出席して一生懸命にノートをとっていました。ところが、神経生理学の講義内容がさっぱりわかりません、しばらくしてその講義に出なくなりドロップアウトしてしまいました。そして、学年末に受けた神経生理学の試験は当然のごとく落第してしまいました。当時はのんびりとした時代で、仮進級して臨床実習を受けることができました。しかし、生理学の試験を通ら

なければ医学部は卒業できず、医師国家試験を受けることができませんでした。

さて、それから私は真面目に生理学を勉強しました。追試 3 ヶ月前から分厚い生理学の教科書をとにかく読んで暗記しました。しかし、神経生理学はさっぱりわからなかった。年 1 回行われる追試験を受けて 3 回目で合格し、やっとの思いで卒業しました。追試に受かった時にこれで生理学とは生涯縁が切れると思うと本当に嬉しかったのを覚えています。さて、そんな私が卒業後 10 年間ほどいろいろな施設・病院で働いた後に、再び生理学に縁ができてしまいました。

平成 14 年 (2002 年) に山形大学医学部は大講座制に移行し、それまで私が属していた旧生理学第 2 講座は他の 5 つの基礎・臨床講座とともに器官機能統御学講座に統合され、その 1 分野に再編されました。その時に講座の教官の定員が基本的に教授 1 名、助教授 1 名、助手 1 名の 3 名に減員されました。学生時代は教官として学生を前に生理学を講義することなど夢にも思っていませんでした。また、私は、助手当時は、「生理学教室を辞めたらどうやって生活しようか」と思い、産業医や労働衛生コンサルタント、衛生工学衛生管理者などという資格を取得して、時々、学外で活動していました。しかし、私は平成 14 年 5 月に助教授になり、本格的に生理学の授業を担当するようになりました。生理学と付き合う覚悟を決めたのはこの頃だったように思います。

平成 16 年 (2004 年) に山形大学が国立大学法人として新たにスタートしましたが、同年 6 月に旧生理学第 1 講座が腫瘍分子医科学分野に改組さ

れ、生理学を教える講座が1講座になったため生理学講義・実習の多くの部分を私たちの教室が担うことになりました。また、山形大学にも労働安全衛生法および労働基準法が適用されるようになり、私に学内の安全衛生の仕事の多くが振り向けられるようになりました。

私が生理学の講義をするようになってから、しばらくして医学コアカリキュラムが導入されるようになりました。医学コアカリキュラムは、各器官および臓器別に生理学的な知識の獲得とその理解を一般目標としてあげています。そして、その具体的な学習内容について到達目標としてあげています。臨床教育もコアカリキュラムに沿って臓器別の講義に再編されました。これは、いままで研究の延長線上に存在していた日本の生理学教育の大転換点であったように思われます。

従って、私の教室でも基礎医学教育終了後に行われる臨床教育を念頭に入れ、臓器・組織の正常機能の知識を満遍なく学生に講義する必要が生じました。当教室で教える守備範囲が拡大し、教育面での負担が倍増しました。教養学部の廃止の影響も大きく、医学英語や教養教育の一部も担わざるを得ません。現在、私は4月から翌年の2月まで週1回から2回のペースで学生講義をしています。衛生委員会や産業医の仕事など学内の労務・庶務係の仕事もしています。教室の責任者になってしまいましたが、法人化された地方大学では、少ない人員で効率よく課された業務をこなさなけ

ればならないため、致し方がありません。

教室の研究テーマは、中枢神経系、とくに脳の高次機能に関するものです。中でも、記憶と学習について研究を進めています。記憶と学習の細胞レベルのメカニズムとして、中枢神経シナプスの可塑性があげられ、当教室ではその分子メカニズムを研究しています。また、グリア機能をニューロンとグリアの相互作用という観点から研究しています。今後は病態解析や臨床薬理学的研究など臨床応用レベルまで研究範囲を拡大したいと希望しています。

福沢諭吉は「学問のすすめ」において「学者の職分を論ず」を記し、「学者は学者にて私に事をなすべし」と説いています。現在、私がなすべき事は、自然の偉大さと比した己の無能を悟りつつ、研究と教育を通じて次の世代に生理学を伝えてゆく事ではないかと考えています。皆様、どうか宜しくお願いいたします。

略歴

昭和 59 年 3 月	秋田大学医学部卒業
昭和 59 年 4 月	秋田大学医学部助手 脳神経外科学
昭和 63 年 4 月	国立東京第二病院レジデント
平成 6 年 8 月	山形大学医学部助手 生理学第二講座
平成 14 年 5 月	山形大学医学部助教授
平成 20 年 3 月	山形大学医学部教授